

平成 21 年 2 月 12 日

(株)小松航空機製作所 調査・中間報告書-2
小松市訪問調査報告書

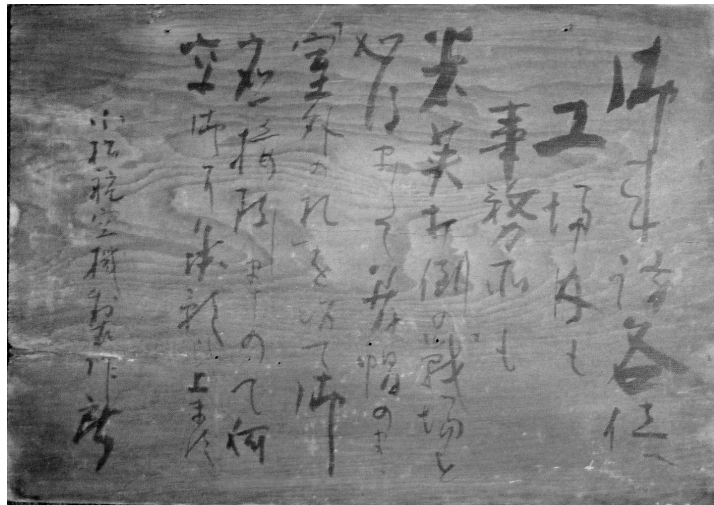
丸谷憲二

1 はじめに

小松航空機製作所の現地調査のために平成 20 年 12 月 20～22 日に石川県小松市を訪問した。『(株)小松航空機製作所 調査・中間報告書 (平成 20 年 11 月 27 日)』の確認が目的である。

2 小松航空機製作所・「社員心得」発見

小松航空機製作所の唯一の遺品が事務所に掲げてあった「社員心得」である。



小松航空機製作所・「社員心得」・北川昇三氏蔵

ご来臨各位

工場内も 事務所も 米英打倒の戦場と心得まして着帽のまゝ 「室外の礼」を以て 御名一揖（ゆう）致しますので何卒御了承願上ます

小松航空機製作所

3 分工場所在地確認

(株)小松航空機製作所

住所 石川県小松市大領中町イ-191 電話 653 番 振替金沢 21635 番

分工場 石川県小松市向本折町寅 40 電話 655 番

石川県小松市大領中町甲 248

3.1 小松市向本折町寅 40

「向本折町寅 40」の現地番「向本折町 38-1」は川村駿氏の自宅である。川村駿氏の弟の格氏は父（八郎）の友人である。向本折小学校と前川との中間地点である。竹下一郎氏が税務課地番変更資料（昭和 44 年 8 月）にて確認され 12 月 20 日にご案内いただいた。

3.2 小松市大領中町甲 248

小松市役所総務課の「大領中町町名整理土地家屋新旧旧新対照表」には「大領中町甲 248」の地番は記録されていない。「大領中町には甲番地が無い」との回答を請けたが「記録が無い」が正確だと考える。

4 戦時中の金野村・記録

中島飛行機株式会社半田製作所から石川県金野村「第 121 支廠小松工場」への疎開は、昭和 20 年 3 月頃から本格的になり移転作業が開始された。小松工場製の第 1 号機である彩雲（艦偵 C6N1）が完成した 4 月 30 日に、小松疎開地区の開所式が勸進帳で有名な安宅の関にて盛大に挙行され、彩雲の初飛行が実施された。1945 年 3 月には石川県小松市への移動が始まり、4 月 30 日には「彩雲」の疎開 1 号機を完成と初飛行をさせている。ここも砕石跡の地下工場で敗戦までに 8,000 m²に約 100 台の工作機械が据えられていた。中島飛行機の地下工場建設についてみれば、工場建設は全国 16 ケ所におよんでいる。主なものをあげれば、石川県遊泉寺などである。これらの地下工場は朝鮮人の強制動員によって建設された。

航空宇宙部品製造で知られる輸送機工業㈱の監査役をされていた斎藤昇氏の中島飛行機時代の思い出である。斎藤昇氏は昭和 18 年 1 月に半田製作所に転勤となり製造部組立工場長になられた。戦後は平和産業への転換に尽力され鉄道車両や漁船の製造に取り組み昭和 33 年に退任された。斎藤昇氏が退任に当たって「輸送機工業㈱の社内報」に投稿されたものである。40 余年にわたる日記を元にしてはいるが、半田製作所から小松に疎開する際、その混乱の中で一部が失われた部分は記憶をたどって書かれたとのこと。終戦の混乱により終戦の昭和 20 年の記述は薄いものとなっている。

4.1 聞き取り調査

竹下一郎氏（小松市史編纂室）に平成 20 年 12 月 20 日に金野村を案内していただき、92 歳になられる伊賀光臣氏（郷土史家）をご紹介いただいた。金野村についての伊賀光臣氏の調査では「第 121 支廠小松工場」の記録はない。しかし、伊賀光臣氏は「郵便局の裏に得たいの知れない工場があった」と説明された。海軍の最高軍事機密であり一般には情報が公開されていなかった。小村茂氏（石川県立航空プラザ館長）は「金野村の外れの広い敷地や小学校には海軍の物資が大量に持ち込まれていた。また、東山には多くの土山や穴があった」と説明された。

4.2 石川県史現代篇調査

「第三十一海軍航空廠小松分工場」小松市

昭和 20 年 4 月 1 日に設けられて小松航空基地の兵器や材料の補給に当たっていた。

「小松海軍物資集積所」能美郡

昭和 19 年から海軍の物資を疎開して盲谷や遊泉寺の洞窟に運搬されていた。

5 石川県立航空プラザ・「銀河の翼端」展示の経緯

小松木工有限会社跡地より小松自衛隊へ銀河を運搬されたのは安達茂治氏である。

5.1 旧海軍新鋭爆撃機「銀河」の翼端について 安達茂治氏報告

平成 20 年 12 月 20 日

旧海軍新鋭爆撃機「銀河」の翼端について

平成 4 年頃、空自小松基地の広報班に小松市大領中町一丁目 292 に在住の丸谷烈子さんから電話があり私（安達茂治）が対応しました。内容は、「旧軍の飛行機の翼を持っているので寄贈したい」とのことで、丸谷さん宅まで私が受け取りに出向きました。

その場で翼のことについてお話をお聞きしましたが、「当時、軍の指定を受けて小松航空機製作所の名称で、自宅向いの工場で約 1 年間、木製の翼の先端のみを製造し、完成品を箱詰めにして鉄道で名古屋方面へ送り出していた。このたび、その工場を取り壊すことになって中を整理していたら、その当時、製造していた翼が出てきた。これは銀河という飛行機の翼の先端である。」とのことを告げられました。

旧軍のしかも銀河爆撃機の翼となれば、全国唯一の貴重な品で、基地の中にもうずもらせておくよりも、近年中に建設されるという航空プラザの展示品にした方が PR 効果は大きいと考えて自ら自宅に保管を続け、平成 7 年 11 月の開館前に同館に搬入し、金沢から持ち込まれた他の展示品と一緒に旧海軍コーナーに展示を始めて現在に至っております。

銀河の翼は、平成 7 年 11 月に丸谷烈子さんから航空プラザに寄贈された形で事務処理されております。以上

安達茂治

追加説明として「主翼は 3 枚あった。2 枚を展示した。1 枚は大分県佐伯市の実家へ送付した。海上自衛隊・鹿屋航空基地史料館（鹿児島県鹿屋市西原 3 丁目 11-2）に展示したいと考えたからである。しかし、現在行方不明になっている。九州で銀河の翼が発見されたら小松航空機製作所製である。引取時の現物は下地塗りしたままであった。」

6 まとめ

石川県には「第 121 支廠小松工場」の記録はない。「戦時中に小松製作所栗津工場の周辺に多くの飛行機協力工場があった」と安達茂治氏は説明された。戦時中の小松市の産業史・航空機産業の実態調査は実施されていない。「第 121 支廠小松工場」に関する文献資料は、『日本航空機総集 中島篇 1963 出版協同社』P232「第 1 軍需工場 生産施設一覧表」のみである。中島飛行機が第 1 軍需工場となり、川西航空機が第 2 軍需工場となった。官有かつ官営の戦時運営方式が執られていた。

第 1 軍需工場 生産施設一覧表より石川県関連のみ抜粋

機体（海軍）	第 3 製造廠	半田製作所	愛知県半田市
	第 121 支廠	小松工場	石川県金野村
	第 357 分廠	大聖寺工場	石川県大聖寺町
	第 358 分廠	栗津工場	石川県栗津町

	第 359 分廠 遊泉寺工場	石川県鶴川町
--	----------------	--------

小松市の産業史は「小松製作所」の創設者・竹内明太郎(1860～1928)に始まる。竹内明太郎は明治 35 年(1902)に遊泉寺銅山の経営を引継拡大した。高知県宿毛市出身で吉田茂の実兄である。大正 6 年(1917)に小松鉄工所を設立した。現在の小松製作所(コマツ)である。大領中町に小松製作所の社宅があり、祖父・泉吉平、伯父・丸谷清信(川西航空機で設計担当→)も小松製作所勤務である。背景に小松製作所が見えてきている。

7 謝辞

竹下一郎様(小松市史編纂室)に平成 20 年 12 月 20 日に現地を御案内いただきました。12 月 21 日に小村茂様(石川県立航空プラザ館長)、小松木工(有)跡地より小松自衛隊へ銀河翼端を運搬された安達茂治様にご指導いただきました。

8 参考文献

- ① 「第 1 軍需工場 生産施設一覧表」『日本航空機総集 中島篇』 1963 出版協同社
- ② 『石川県史現代篇(1) 第三節 太平洋戦争』昭和 37 年 石川県
- ③ 中島飛行機の思い出
<http://www.ne.jp/asahi/airplane/museum/nakajima/nakajima-saito/saito2/naka44-45.html>
- ④ 中島飛行機株式会社その軌跡 半田製作所
<http://www.ne.jp/asahi/airplane/museum/nakajima/nakajima31.html>
- ⑤ 浜松の軍需工場と疎開
<http://www16.ocn.ne.jp/~pacohama/kyosei/hamamatsu.html>